二人のマリオ

折葉　沢居

（一）

日本人の名前には、薫とか、博美、克美、真澄などのように、ときに男なのか女なのか判然としないものもあるが、普通、男の子につく名前、女の子につく名前だと判るものが多い。そういう意味で、山本真理子は自分の真理子が典型的な女名で、マリという名を持つ男の子がいるとは想像すらしなかった。だから真理子がはじめて島津万里生（まりお）に出会ったときの驚きは一通りではなかった。

それは真理子が県立湘南高校三年生になった四月のことだったが、大阪からの転校生が彼女のいる三Gのクラスに入って来、島津万里生だと紹介されたのだった。万里生は島津製作所を経営する父親の藤沢への転居に伴って大阪から移住してきたのだが、明るく物怖じしない性格で、「大きに」「大きに」を連発したものだから、たちまち「オオキニ」という渾名がつけられた。もっとも彼がオオキニと呼ばれたのははじめのうちだけで、すぐに「キニ」という短縮形が生み出され、それがそのまま定着した。

キニの万里生は父親が中国史に興味を持ち、万里の長城に因んでつけた名前だということだったが、中肉中背、短距離を得意とするなかなかのアスリートだった。湘南高校に転入するとすぐに陸上競技部に入り毎日日の暮れるまで熱心に練習に励んだ。五月に行われた体育祭で彼は五千メートル走とスウェーデンリレー（アンカー）に出場した。本来長距離走は得意ではなかったが、陸上競技部員として毎日の練習をこなしていたため、競技では一日の長があり、スタートダッシュで他を引き離すとあとはほとんど独走の状態で軽々と優勝した。リレーのアンカーでは四〇〇メートルの区間だったが、彼がバトンを受けたときトップの走者とは五、六〇メートルの差があると見えたにもかかわらず、残り一〇〇メートルのところで追いつき、悠々と併走した上で、余裕を持ってトップでテープを切ったのだった。体育祭での花は何といっても徒競走であるから、万里生の活躍は多くの人々の耳目を集め、彼は一躍校内の人気者になった。

六月に入ると湘南高校では大学受験のための模擬試験が行われる。八クラス四〇〇人余の受検生のトップテンにG組からは二人が入ったのだが、一人は真理子の四位で、もう一人は万里生の八位だった。真理子は高校入学以来ずっと成績優秀で実力試験や模擬試験のトップテンの常連だったから、誰も驚きはしなかったが、転校してきたばかりの万里生の好成績には皆驚きを隠せなかった。

こうした万里生の文武両道にわたる活躍ぶりに接して、真理子は自然に万里生に惹かれていく自分に気づくのだった。特に「マリ」という名を持つ男の子はいないと信じてきた真理子の前に突如現れた万里生だったから、それだけ他とは違う格別の親近感を抱いたのかもしれなかった。

しかし、昭和三〇年代はじめの高校生では、太平洋戦争敗戦から一〇年ほどが経過した頃の復興途上の時代の中で、今でいうデートなどということは思いもつかないことだったから、二人はせいぜい英語や数学の問題でお互いに聞きあうくらいの付き合い方しかできなかった。二人は湘南高校を卒業すると大学に進学することになった。真理子は東京教育大学国文科、万里生は大阪大学物理学科が進学先であった。

進路が決まった二人は三月の半ば、はじめて横浜へ遊びに行った。その以前、横浜市内に住む真理子が伊勢山皇大神宮に合格祈願のため参詣していた経緯があって、大学合格のお礼参りをする都合があったのを機縁としたためだった。

伊勢山皇大神宮は国電桜木町駅の西方、徒歩一〇分ほどの野毛山の小高い丘の上に位置し、一八七〇(明治三)年、時の副知事の建白により横浜總鎮守として国費で創建された。今でも「関東のお伊勢さま」として広く崇敬されているが、広々とした境内は一〇種類のサクラが咲く花の名所でもある。二人が参詣したときはまだサクラの季節には早かったから人影も疎らで、ゆったりと落ち着いて参拝を済ませた二人は、成田山横浜別院前の階段を降りてそのまま徒歩で南京街へ行き、その頃獅子文六の小説『やっさもっさ』に登場して爆発的に名前の売れ出した広東料理の「海員閣」で昼飯を認めた。食後はまた歩いて元町でウィンドウショッピングを楽しみ、谷戸坂を登って港の見える丘公園を経て外人墓地へ出、山手本通りをひたすら歩いて麦田からイタリア公園へ降りて、市内電車で横浜駅まで戻り、そこで別れてそれぞれ帰宅した。

「あのときは二人でよく歩いたものだ」と真理子は後

になって思い出すこともあった。真理子はキニに淡い慕情を感じながら歩を進めたのだが、もちろんキッスはおろか、手をつなぐということもなく、ひたすら歩くだけだったのをとても幼いこととして思い出したりしたのだった。

大学へ進んだ二人は、離れ離れになったこともあって、付き合いが深まることもなく、その記憶は時の流れの底に深く沈んで、いつとはなしに思い出されることも稀になっていった。

2007 年新改築された
湘南高校正門

伊勢山皇大神宮

横浜中華街海員閣

（二）

山本真理子が二人目のマリオに遭遇したのは彼女が大学三年生のときのことで、選択した近藤晶教授の「近世文学史・江戸時代の大衆芸能」というゼミの最初の授業のときのことだった。この二学年続きのゼミを専攻した学生は全部で八名だったが、その中に山川摩利夫がいたのだ。摩利夫はその年の春に言語学科を卒業して学士入学で国文科にやってきた学生だった。摩利夫の父が仏教に深く帰依していて摩利支天に因んで息子の名をつけたのだと聞いた。

近藤ゼミは毎週火曜日の午前の二コマ続きの授業で、歌舞伎、浄瑠璃、長唄から、川柳・狂歌・都都逸、また、小噺・落語・講談といったジャンルをカバーする幅の広いゼミで、時には川柳や都都逸、小噺の習作に励むことも珍しいことではなく、よくそれぞれの名前を折り句にした川柳や都都逸を創ったものだった。

●野の花も　葉っぱも紅葉　洛西は（野原）

「わあ、綺麗な句！　野原さん、京都へは行ったことあるの？」

「行ったことはあるけど、紅葉の時じゃなかったわ」

●華やいで　落語を語る　談志師匠（原田）

「落語好きの原田君らしいわね。立川談志は好きなの？」

「好きなのは円生とか、小さんとか、文楽や小三治なんだけれど。談志は「だ」という字が指定されているから仕方がないんだ」

●紫の　楽焼見たし　気もそぞろ（村木）

「確かに楽焼って、できてくるまで気が落ち着かないわね」

「紫の楽焼って、どんな感じかしら？」

●罪作り　坊やぼやぼや　居候（坪井）

「坊やって、落語の若旦那？」

「そう、道具屋とか湯屋番とか、親に勘当されて親方のところに一時身を寄せるっていうのがあるでしょ？あのイメージ」

●焼いても煮ても　マダラは旨い　もっと食べたい　豆腐鍋（山本）

「真鱈っていうのがいいわね。真鯛なんかでなくて」

「庶民的で素直な都々逸だわ」

●やんややんやの　間を置けばこそ　喝采浴びる　童たち（山川）

「これ、間をおいて、やんややんやと声がかかるの？」

「ちょっと苦しい句なんだけど、まあそういうこと」
「童たちというのは、ここでは童歌より広い感じね」
●あなた大好き　お金も溢れ　山も持ってる　間抜け面（青山）
「これも落語の話かしら？」
「イヤ、金持ちの二代目。いいようにホステスなんかにあしらわれている様子」
●照るも曇るも　瑠璃ビタキ鳴く　森や山郷　朋多し（照本）
「朋多しの朋は瑠璃ビタキのこと？　それとも人間？」
「どっちにも解釈できるわね」

誰が作ったものか、駄洒落専科みたいな小噺もある。

●「相続のことなんかがあって、改めて考えたんだけれどボクの妻は内縁なんだ。君のところは正式だろう」
「うん、カミさんとの婚姻届はちゃんと出したよ。でもボクに外縁の妻がいてね。最近事故を起こして弱っているんだ」
「人身事故？」
「ううん、妊娠事故」
●「君、出身大学は？」
「入学したのが東京教育大学だったのは確かだけれど、化学反応を起こして出るときは薬科大学だった」
「え、どこの薬科大学？」
「うん、一杯やっか」

近藤ゼミ選択の八名は男子二名、女子六名だったが、卒業後はそれぞれの出身地に帰って国語の教師になった。高校五名、中学三名という振り分けだった。就職して学校での暮らしが始まると、ゼミの同期生のことを思い出すこともなく、せいぜい女性同士がそれぞれの結婚式に招待しあうぐらいの付き合いがあった程度で、それも一時のことだったから普段は年賀状のやり取りだけで済ませる状態だった。

真理子が結婚したのは大学卒業後二年のことで、同じ藤沢高校に勤務する県行政職員（学校事務職員）の岩井創と恋に落ちた挙句のことだった。岩井は幼いときに父を亡くし、母一人子一人の境遇で県立高校卒業と同時に県職員として採用され、出先機関を二つほど廻って藤沢高校に勤務していたときに真理子が新採用教員として赴任してきて知りあったのだ。結婚後は岩井の家に入ったから、真理子と母の久子とはいわゆる嫁

姑の間柄となったが、二人とも聡明であったため格別の確執を生むこともなく、円満に一家の生活が営まれた。真理子夫婦は一男一女に恵まれたが、真理子は義母久子の助けのお蔭で出産と育児に当り、教職を離れることなく仕事を続けることができたのだった。

はしなくも真理子がいわゆる不倫の恋に落ちたのは三〇台も後半にかかった頃のことだった。相手は真理子より三歳年下の飯島徹といい、飯島が藤沢高校に転勤してきて二年目に同じ学年の学級担任になったのがきっかけとなった。学年団で会議もすれば、相談もする。ときには宴会で飲み会もするという関係が重なって次第に互いが引かれ合うようになっていった。

飯島は若いに似ず判断が冷静で常に座がまとまるような具体的な意見を出して全体をリードしていくことに長けていたのだが、真理子は先ずそのことで飯島に引かれた。しかも飯島は決して自分から意見を出して有無を言わせないという姿勢ではなく、控え目な態度に終始するのだ。笑顔が優しく包容力に富んでもいた。真理子はそういうところにも魅力を感じたのだった。

真理子は二人の子どもが大きくなって育児に手がかからなくなって少し寂しさを感じたり、夫の創が浮気にうつつを抜かすような素振りが見えて、気持ちの落ち込んだ弱みが飯島の甘い囁きを誘ったのかもしれなかった。県立教育センターでの研修に出た二人が藤沢の寿司屋で軽く一杯やったのが引き金になった。急なピッチでお酒を呷ったのが真理子の胃と脚を襲い近くのホテルで休んだのがいけなかった。

一度身体の関係ができると離れがたくなるのが道理で二人の関係は密度を増したが、慎重に振る舞ったから周囲に気づかれることもなく数ヶ月続いた。破局は突然やってきた。年が明けて新年を迎えた早々のことだったが、かねてから噂も飛び交っていたように、飯島が県高教組の執行委員に立候補する羽目になったのだった。小なりと言えど本部役員は組合員の投票で決まるから、醜聞は御法度である。出るからには当選を目指すのは当然のことであり、二人はこれを契機に関係を絶つことにした。真理子に未練が残らなかったと言えばウソになるが、未来永劫に続く縁とは言えないことも確かなことで、懊悩の上精算に踏み切ったのだった。

二人が逢瀬を重ねていたとき、真理子が折り句の話をしたことがある。飯島はことのほか興味を覚えた様子で、たちどころにいいじまを折り込んだ二、三の都々逸が浮かんだふうであった。お世辞にも秀句とは言え

ないが、初めてにしてはまずまずの出来だと真理子は思った。

●いい酒飲んで　いい人抱いた　自慢話は　正の夢
●勇みに勇んで　戦に出たが　事態変わって　負け戦
●いいことしたねと　言われてみても　時代錯誤の　負け惜しみ
●いい値納得　いかにも安い　自宅で見れば　丸で損

不思議な符合だが、真理子が飯島との短い縁を切ったとき真理子の夫の創もまた浮気の虫から解放されたというふうだった。

蛇足を加えると、本部執行部に出た飯島は執行委員二期、書記次長二期を務めて次は書記長かと周囲の期待が高まったところで突然組合役員を降りる羽目に陥った。執行部へ出てから足を踏み入れるようになったスナックの女の子と深みにはまり、借金で首が回らなくなった結果が明るみに出たためだった。かつて真理子が密かに危惧していたことが現実のことになってしまったのだった。

この間特に近藤ゼミの同期の仲間のことを思い出すこともなかったが、真理子が五〇歳の誕生日を過ぎて、教員も残りが一〇年ほどだという感慨に耽ったとき、突如として、「その後あとの七人はどうしただろう。そろそろみんなで会う機会を持ってもいいのではないか」という考えが閃いた。二、三人に電話で意向を聞いてみると全員が賛成だということだったので、真理子は幹事を引き受けてはじめての同期会を企画することにした。

何度も手紙や電話のやり取りを繰り返して、箱根にある県職員保養所を会場に第一回同期会を持ったのはその年度末、三月中旬の土日のことだったが、直前になって、千葉県在住の野原弘子から、定時制勤務の教頭で校長の許可がもらえないから出席できない旨の連絡があり、栃木県の青山匡子から、緊急の会議が入ったために参加できない旨の電話が来て、結局六名での会合となった。酒食の宴ははじめちょっとぎこちないところもあったが、あっという間に三〇年ほどの時間の距離が縮まり、学生時代に戻って話に花が咲いた。翌日は芦ノ湖畔から元箱根付近の美術館や名所旧跡を廻り、熱海に降りて真鶴で昼飯を摂り、小田原駅頭で散会した。

第一回目の会合の最後に第二回同期会の幹事は茨城県在住の照本静子に決まった。いつごろ開催するか、どこで開くか、などは幹事一任ということだったが、

何年経っても一向に同期会開催の案内の来ないまま一〇年が経過した。真理子が風の噂に聞いたところ、この間幹事の照本は胃潰瘍をこじらせて、同期会どころではなかったらしかった。第二回近藤ゼミ同期会の知らせが真理子の許に届いたのは彼女たちが定年退職した年の秋のことだった。

会は水戸の偕楽園近くで開かれたが、前回同様千葉の野原弘子と栃木の青山匡子が欠席だったほか、富山の原田章から

「第二回同期会を楽しみにしていたが、医者から遠出を禁じられているので、残念ながら参加できない」

という連絡が入って、結局五人での同期会となった。

「そういう事情なら、次回は原田章君が参加しやすいように富山近辺でやろう」

ということに意見が一致して散会したのだったが、それから一年ほどが経過した頃、突然原田夫人から真理子に連絡が入り、彼は心臓病の悪化のために他界したということだった。

こうして、富山近辺で持とうとした同期会は沙汰止みとなり、改めて山形の村木素子が幹事となって企画されることとなった第三回目の同期会は前回の水戸開催から六年後、蔵王温泉で開催された。その前年には福島出身の同期生坪井加世が子宮ガンのために鬼籍に入っていたのだが、遺族の意向により同期生にはその事実は伏せられていたのだ。蔵王での同期会のための連絡を取ったときはじめて坪井死去のことが知らされた。最初八名だった同期の仲間は六人に減じていたが、このときも千葉の野原弘子は無断欠席だったから、蔵王に集まったのは五名だった。もともと二人しかいなかった男性のうち富山の原田章がなくなったため男は山川摩利夫一人になっていたが、彼は意に介すふうもなく蔵王の同期会に参加して、皆を喜ばせた。

例によって酒食の宴は盛会となり、話はいつ果てるともなく続いていたが、岩井(山本)真理子は頃合いを見て、

「今年に続く来年の話だけれど、もしみんなの賛成を得られたら、七回忌を迎える原田章の墓参の会を持ってはどうだろう」

と提案した。皆大賛成で、企画は真理子が担当することにも衆議が一決した。すると、このとき茨城の照本静子が

「そういうことなら、来年までの一年を使って追悼集というか、記念文集というか、とにかくそういうものを創ってはどうか。二人も亡くなったことだし」

という提案をし、皆、こぞって
「そうしよう、そうしよう」
と声を揃えた。自費出版の幹事は成り行きで照本が引き受けることとなり、原稿はいつまでに、などという具体的な話に続いていくのだった。
第三回同期会から帰ると、真理子は早速原田夫人と連絡を取り、故夫君の七回忌の墓参の企画に是非お許しをいただきたい旨要請した。原田夫人はあまり気乗りのしない様子だったが、真理子の重ねての懇願を受けて、最後は応諾する姿勢を見せ、菩提寺が富山駅からそう遠くない荘厳寺であり、その墓苑に故夫君が眠っていることを教えてくれた。

（三）

故原田章の七回忌の墓参行を中心とした旅程案をあれこれ検討した真理子は最終的に宇奈月温泉に泊る案と雨晴に泊る案の二つに絞って皆の意向を聞くことにした。調整の結果、雨晴泊に落ち着いたので、初日は雨晴に直行し、二日目にゆっくり墓参し、その足で原田邸を訪れて夫人に記念誌を贈呈するコースを組み立てた。これならば往きも返りも時間的に無理をしないで済むからだった。
皆が宇奈月より雨晴を選択したのは、豊富な海の幸を堪能するには畏まった旅館やホテルより料理民宿のほうが適していると考えたからだった。真理子は資料を繰って民宿を選び予約を入れた。原田章の命日は三月だったが、皆の都合で墓参行は七月になった。
当日は五月晴れの好天で、指定の上越新幹線のそれぞれの駅で乗り込んだのはこのときも五名で、千葉の野原弘子はやはり現れずじまいだった。彼女は照本の再三の呼びかけにも応えることなく、最後まで記念誌の原稿は届かなかった。越後湯沢で乗り継いだほくほく線の特急はくたかが北陸本線に入ると、車窓から日本海を垣間見ることができる。日本海は太平洋に比べると海の色が深くくすんで見えるのだが、明るい五月晴れの元では冬季よりやはり明るく感じられるのだった。
高岡で乗り換えた氷見線は二〇分ほどで雨晴に着く。駅前から歩いて一行が民宿・よしのやに到着したのは一六時前のこと、皆旅装を解いてゆっくり温泉に漬かった。雨晴の民宿には温泉を引いてあるところもあり、ここもその一つだったが、部屋数は少ない様子で、小奇麗な感じの宿だった。

さすがに料理民宿と謳ってある宿だけあって、海の料理は美味で、豪快だった。旬を迎えた白エビはお刺身でも掻揚げでもなかなかの一品で、皆出された料理を食べつくすことができないほどだった。四回目を数える同期会は和気藹々で、豊かな談笑がいつまでも続くのだった。

久しぶりに折り句を創ってみよう、と誰かが言い出して、早速皆頭を捻ったのだった。

●村はずれ　ライトブルーの　桔梗咲き(村木)
「なかなか綺麗な句だわ」
「桔梗にもいろいろな色があるらしいわね」
●優しいあの娘が　また手を振って　帰る坂道　童歌(山川)
「ゆったりした都々逸だわ」
「さすが山川君」
●浅き夢見し　大山詣で　山の神立ち　舞い扇(青山)
「夢を見て大山に詣でたわけ?」
「大山に詣でて舞を舞う夢を見たんじゃない?」
「まあ、どちらでも」
●天高秋に　るるぶを開き　物見遊山だ　友と行く(照本)
「天高秋とは随分詰めたものだわ」
「都々逸の場合、天高い秋とか、天高き秋とか、体言止めがしっくりしない感じがあるのね」
●病に勝って　ママ回復し　元の元気を　取り戻し(山本)
「まあ随分と判りやすいのね」
「ママって、山本さんのお母さんのこと?」
「そういうわけでもないんだけど。何となく」
ついでにここにいない三人の分も創っちゃおうか、ということになって捻りだしたのは
●野に咲くは　春バラ牡丹　ラン尽くし(野原)
「ウン、とても素敵」
「野原さんの感じじゃないけれど」
●腹減って　ライスカレーに　大ラーメン(原田)
「随分ストレートだこと」
「これは原田君のというより食べ盛りの原田君の息子さんのことね」
●筒井筒　盆と正月　いや栄え(坪井)
「そう、坪井さんのところは夫婦仲がよかったから」
「そうか、盆と正月は一年中という意味にも取れるわけね」

因みに、真理子は文学より語学のほうに興味があり、俳句や短歌は苦手のほうだったから、これはと自讃できる句はいくつもないのだが、生涯の作品の中で、次の三つだけはなかなか自然体でいいのではないかと密かに思って、ときどき思い出している。ほとんどが年齢の行ってからの作品である。

●赤葉黄葉　青葉競いて　朝の秋

秋が段々深まって通勤途上の桜並木が紅葉する頃になると、赤、黄、緑の葉が交じり合うようになる。これが朝日に映える様を詠んだものだが、「青葉競いて」というところがなかなか納まらなくて苦労した記憶がある。原案では「青葉交おう」だったのだが、交合うという意味の交おうが正しい日本語であるかどうか、自信が持てなかったのだった。競うという葉々の自己主張が適しているかどうか、ちょっと心配がないわけではないが、交おうよりはましかなと思って落ち着いたのだった。

●黄昏て　黒のネクタイ　締め難し

定年が過ぎた頃の夫の様子を見て詠んだ句である。黄昏は夕方薄暮の頃という意味と人生の晩年前の頃を掛けている。ネクタイをする機会もめっきり減って、お通夜お葬式の礼服着用の時ぐらいになってしまった。その意味で、最後の五文字は「締め易し」とどちらのものかしばらく考えて「締め難し」を選んだ経過がある。締め難いのは故人との思い出感無量ということであるが、締め易いのは黒がネクタイ掛けの一番手に掛かっているからである。

●鍋四つ　棚に重ねて　除夜の鐘

高校教員現職中は何かと忙しく、お正月用のおせち料理も暮れの三〇日、三一日に漸く手が着くという有様だったから、大晦日も除夜の鐘を聞きながらお煮染めを煮るようなことがよくあったものだった。結婚後は義母の久子が何にも手を抜くということを嫌ったから、昆布巻きも黒豆も松前漬けも出来合いを買ってくるようなことがなく、真理子にも作り方を丁寧に教えてくれて、自前で作ることを勧めた。真理子はときには面倒だとは思うこともあったものの、あえて逆らうことはできなかった。そういう経験からこの句は自然に生まれたのだった。

鍋は四つがぴったりだと思った。三つでも五つでもしっくりこない。「棚に重ねて」のところは「棚に並べて」とどちらのものか随分推敲した気がするが、「並べて」ではいかにも平板という感じだったので、「重ね

て」に落ち着いたのだった。
　ところがこの句を得てしばらく後のことであるが、真理子はこれにはいくつかのバリエーションのあることに思い当たった。

●鍋一つ　棚に被せて　除夜の鐘
●鍋二つ　棚に重ねて　除夜の鐘
●鍋三つ　棚に重ねて　除夜の鐘

　という具合に鍋の数を変えてみて、それぞれ趣の違いのあることに気づいたのだ。鍋一つの場合は棚に重ねてというより棚に被せてのほうが合うように思うが、鍋一つを駆使しておせち料理をこしらえるそのひっそりとした寂寥感が捨てがたい。夫に先立たれて独りぼっちで正月を迎える雰囲気が表されるようだ。二つには二つの趣があり、三つには三つの趣があって面白いが、鍋は四つまでが事実上限度だろう。大家族構成なら五つ以上もあるかもしれないが、普通家庭用のレンジは二つまでだからである。
　さらに、この句の「除夜の鐘」の部分を句の冒頭に持ってきて

●除夜の鐘　棚に重ねる　鍋四つ

　とするのもありそうだと真理子は思った。こう位置を変えることで「除夜の鐘」が強調されるのは当然だが、「鍋四つ」もまた強められる結果になるようである。
　すると、バリエーションのほうは

●除夜の鐘　棚に被せる　鍋一つ
●除夜の鐘　棚に重ねる　鍋二つ
●除夜の鐘　棚に重ねる　鍋三つ

　ということになるわけである。
　ひとしきり折り句で盛り上がった宴に、この年は照本静子が苦労を重ねて出版した記念誌がある。A四版の大型本で懐かしい写真も大きい分だけ迫力満点だった。内容の中心は皆が寄稿した「学生時代の思い出」だが、学生時代の学科目分担表や今は亡き近藤晶教授のプロフィルと講義録、当時皆が出没した池袋周辺の繁華街のイラストなど、どうやって集めてきたのか皆が訝しく思うような貴重な資料が満載されていた。
　真理子がこの記念誌に寄稿したのは次のような一文だった。

氷見線・雨晴駅

民宿よしのや

【原田章君七回忌墓参記念文集】

大学卒業前一ヶ月の思い出は麻雀

「六五歳以上には見えませんか？」

「ええ、とてもとても」

私が二〇〇円を差し出してお釣りをもらいたいという仕草をしたときのこと、入場券売場の初老の係女史は怪訝そうな顔をして、何かお年の判るものをお持ちではありませんか、と聞いたのでした。私が一連ののの

瘞鶴(えいよう)碑

ろのろした動作の末、日頃から携行している国民健康保険被保険者証を取り出して示しますと
「あ、それで充分です」
と言って五〇円のお釣りを返してくれました。二〇〇×年六月、あの後楽園の庭園はどうなっているだろうかを確認するために何十年ぶりかで都立小石川後楽園を訪れたときのことでした。入場料は一般三〇〇円、六五歳以上一五〇円と掲示されているのです。
「昔の入り口は地下鉄丸ノ内線後楽園駅に近いところにあったように記憶しているんですけれど」
「はい、正門は駅のすぐ前ですが、今は使っておりません。一九八八(昭和六三)年三月にドーム球場ができて、近くが混雑するようになって閉鎖したんです」
「駅前の道路も昔は簡単に渡れたけれど、今はすっかり見違えるような通りになっていますね。今の入り口は昔の正門からほぼ四分の三周したところだから、案内板の矢印の反対から来るほうが近かったのでしょうか。涵徳亭は昔からここでしたでしょうか」
「はい、これは以前からここにありました」
こんなやりとりをして庭園の中に入り、何はともあれ、池の畔を伝って昔の正門を目指したのですが、懐かしく思い出されるということがありません。すっかり忘れているのです。大学を卒業する前の一月から三月の頃、何が気に入ったのか、私は二日に一度、三日に一度という割合でこの庭園を訪れていたように記憶しているのですが、そういう記憶そのものが実は怪しいのかもしれません。もっとも、私の場合、庭園を訪れるときは「訪れる」こと自体が大事なことなのでして、その中に何がどのように置かれているかを「記憶に留める」ことにほとんど関心のないことが多いので、その記憶ははじめからないのかもしれません。
訪れる人が多く雑踏していたとか、ほとんど人影がなくて心が安まったとか、そういうムード的なことに関心を持つことが多いから、久しぶりに後楽園を訪れて気になったのは、庭園の中にいて、外堀通り沿いに建っているトヨタ自動車本社の社屋や住宅金融公庫などのノッポビルが目につくことで、何とはない違和感がずっと消えないのでした。
違和感と言えば、正門から内庭を廻って中央の池を梅林のほうへ向かってすぐのところに、ちょっと奥まって瘞鶴(えいよう)碑という碑が建っていたのですが、これが何とタカの供養塔なのです。もちろんこの碑は私たちが学生の頃にも建っていたはずだし、そうすれば当然目に触れたに違いなく、そのときはどんな感想

を持ったか、まったく記憶はないのですが、今改めて、その説明文を読むと大いなる違和感というか疑問というか、抵抗を感ずるほかないのでした。

説明文を逐語的に記録してきたわけではありませんが、およその内容は以下のとおりです。

「水戸藩第七代藩主は治紀(はるとし)といい、幕府からもらった鷹が気に入ってよく鷹狩りに興じた由。この鷹が治紀の没後四年にして死んだとき、第八代藩主斎修(なりのぶ)はこの経緯に思いをいたして、鷹を懇ろに弔いたいとしてこの瘞鶴碑を建立した」

高がタカ一羽のことで目くじらを立てるほどのことはないといえばそれまでですが、この供養塔の建立に要した費用は一体何人分の年貢に相当するのだろうか、と思ったのです。汗水垂らして働いたたくさんの農民の納めた年貢をこんなふうに使ったのだと知ったら、当のお百姓さんはどう思うだろうか、と心が痛んだのでした。

後楽園からの帰りがけに、売店で水戸の銘菓『吉原殿中』を見つけ一つ家への土産にしました。一九九×年四月に結婚した娘が二〇〇×年八月まで水戸に住んでいましたために、その間何回か水戸を訪れたことがあって、熊谷の『五家宝』に似た『吉原殿中』の味は経験済みなのです。

「たった今、水戸から届いたところなんですよ」店番の女将さんがお愛想を添えてくれたのがとても床しい感じでした。

大学を卒業するちょっと前に近藤ゼミ四年一同八人がこの後楽園内にある涵徳亭でご飯を食べたことがあるという話題が、蔵王温泉こまくさ荘での村木素子さん肝煎りの同期会の席で出て一花咲いたのですが、そういわれてみればそんなこともあったなとは思うのですが、細かい記憶がまったく残っていないのが何とも歯がゆく思われます。後楽園へ最初に行ったのは確か私だったはずだから、私が誘って後楽園にみんなで行った揚げ句のことだと推測するのですが、それ以上のことは思い出すこともできないのです。

そもそもあの頃、学生時代をどう過ごしたものだったか、個人的なことを除けば、あまり記憶に留まっておりません。東横線白楽駅近くの自宅から茗荷谷までの通学経路さえ落ち着くまではいろいろ試したものでした。入学当時の丸ノ内線は池袋・お茶ノ水間が淡路町まで延びたばかりで、横浜・東京・お茶ノ水を回って丸ノ内線という時期もありましたし、渋谷・池袋経

由で地下鉄という経路を採った時期もありました。丸ノ内線の東京駅までの延伸が入学した年の七月でしたから、それ以後は東京から丸ノ内線利用で通学するのに落ち着いたと記憶しています。

卒業論文を四年生の一二月に出して一息ついてから、どうやら卒業にも就職にも目途がつきそうになった頃、一時、みんなで麻雀に熱中したことがあります。

「やろう」

と言ったか

「教えてよ」

と言ったか定かではありませんが、言い出したのは確か原田章君。指南役は青山匡子さんで、競技経験のあるのはそのほか確か山川摩利夫さんだけ、という頼りないメンバーでしたが、とにかくみんなで麻雀に興じました。日頃から温厚で、決して率先して何かをやろうと言ったりしたことのない原田君が言い出したことだったから

「珍しいこともあるものだ」

と思った記憶がかすかにあるのです。私が初めて麻雀なるものに出合ったのは間違いなくそのときでした。

雀荘に行くほどの腕前はありませんから、場所はみんなの下宿先、寄宿先の持ち回りですが、大学から遠いところまでは行けないために、結果的に富山県人会寄宿の原田君のところか、あるいは青山さんのアパートということだったでしょう。麻雀牌や麻雀卓などの道具類はどう調達したものだったか記憶にありませんし、指南役の青山さんにしてからがさほどの腕があるというほど熟練していたわけでもありませんから、どうすれば上がれるのか、上がって点数はいくらになるのか、甚だ心許ないことばかりでしたが、何はともあれ、麻雀への取っつきだけは味わって大学を卒業したということでした。

あの頃は今と違って、就職先の高校でも先生方の間で麻雀は結構盛んに行われていましたから、たまに誘われてベテランの雀士たちのカモになりながら麻雀に興じたことを懐かしく思い出しています。

原田君とのことでは心残りがあります。私たちの同期会が今年山形県蔵王温泉で開かれたことは上でちょっと触れたことですが、はじめから数えてこれは三回目の集まりでした。前回は照本静子さんの幹事で水戸で行われたわけですが、このとき原田君から

「医者から遠出を禁じられていて残念だが出席できない」

との断りがあり、彼は不参加を余儀なくされたのでした。

「心臓病を患っていて電車で遠くへ旅行できないそうだ」

ということで、来られない原田君も残念だったでしょうが、会えなくて無念の思いをしたのは私たちも同じでした。そういうことなら、次は原田君が参加できるような彼の近間で集まろうじゃありませんか、と私たちは言い合ったものでした。

その同じ年の八月に「障害児を普通学校へ・全国連絡会」の二年に一度の全国交流集会というものが石川県金沢市で開かれましたが、当然そのことは事前に分かっていることでしたから、交流集会に私が参加する機会を利用して、富山で久しぶりに原田君とお目にかかろうということで彼とは連絡を取り合っていました。交流集会が終わった後富山へ廻って原田さんと旧交を温めるということになれば当然その日の宿が必要ですから、早くから公立学校共済組合の富山保養所・高志会館を予約し、万全を期して集会会場から原田君宅に電話を入れますと、電話に出られた奥様のお話では

「心臓病で急に入院加療することとなったのだが、医者から目下面会謝絶を言われている」

ということを聞かされて、やむなく高志会館をキャンセルして帰宅するほかないのでした。

その後彼が快方に向かっている旨連絡をいただいたことがあり、ホッと胸をなで下ろしていたのですが、突然彼の訃報が飛び込んできて、胸にぽっかり大きな穴が空いた思いを味わうこととなりました。満五年が経過した今に至ってもなお、その胸の穴は大きく空いたままであり、向後、これが満たされることは決してない予感がしているのです。

心から、原田さんのご冥福を祈らずにはいられない思いです。

旧姓坪井の鈴木加世さんにも心残りがあるのです。二回目の同期会を照本静子さんの幹事で開くことは一回目の会の最後に決めたことでした。彼女が病を得てしばらく臥せった後のときのことだったと思うのですが、

「そういうことなら郡山でやりましょうか。私幹事をやりますよ」

と鈴木さんが言ってくださったことがあるのです。下見に郡山を訪れて現地を案内していただきました。そのときは郡山ということがもう一つぴんと来なかった

ために
「またの機会に」
ということにしてしまったのでした。折角の申し出をその時受けずに済ましたのは
「近々別のところに引っ越すことになるかもしれないから、そこでやりましょうか」
と彼女が言ってくれたせいでもあるのですが、結局その引越しは現実のものとはならなかった上、彼女が病の床につくという成り行きになってしまったのです。
　こういうふうに幽冥界を異にするということになるのでしたら、元気なうちに幹事をしていただきたかったと、返す返すも残念でならないのです。
　これは心残りということでなく、強烈な印象を得た思い出のことなのですが、旧姓坪井の鈴木さんが夫君の鈴木氏と結婚したすぐ後に私たち同期生を新居に招いてくださったことがありました。鈴木夫人の手料理をご馳走になったのですが、そのときはじめて供されたグリーンアスパラのバター炒めの一品が今もって強く印象に残っているのです。アスパラガスといえば缶詰の白い手しか見たことも食したこともなかった時代にグリーンの色も鮮やかにバターの風味も香ばしく、皿盛りにされたアスパラの何と高級感溢れる料理であることかと感激したことが忘れられません。それ以後、アスパラと来れば、グリーンでバター炒めでなければならないような気がしています。
　その旧姓坪井の鈴木加世さんが鬼籍に入ったことを知ったのは、彼女が亡くなってから何ヶ月も経ってからのことでした。日頃からよく行き来している間柄ではありませんが、それはお互いに元気で平凡な暮らしを続けているからのことであって、一朝ことが起きた場合のことは自ずから違うのではないかと思っておりましただけに、残念な気がしてなりません。無縁仏が放置されたままでいたという、そういう感じが拭えないのです。
　旧姓坪井の鈴木加世さんの冥福もまた心から祈るばかりです。

羯諦羯諦波羅羯諦。波羅僧羯諦。菩提薩婆訶。般若波羅蜜多心経

（四）

民宿よしのやでのその夜の宴はいつ果てるとも思われないまま延々と続いた。漸く「明日の墓参がある」ことを思い出して就寝に及ぼうとしたのは午前一時を廻っていた頃だったが、宿の番頭さんが現れて

「お泊りは五人ですから、二部屋用意しましたが、お布団は三人と二人に分けておきました」

という。真理子は

「あら、予約のときに、男一人、女四人の二部屋でとお願いしたはずですけれど」

と訂正方の声を挙げたのだが、酔いも手伝って

「夜も遅いことだし、そのままでいいわ。幹事だから私が二人部屋へ行って寝るわ」

と言い、そのまま部屋へ直行した。

「ちょっと気が引けないわけではないけれど、もう七〇歳前後になる二人だから、いまさら間違いが起こる心配もないわ」

と思って、洗面だけ済ませて床に就くことにした。もちろん、部屋は扉を開けたままにした上、山川摩利夫の布団とは離れたところに自分の布団を移動させて寝たのだが、真理子は頭を枕につけるかつけないうちに寝息を立てて寝入ってしまい、そのまま朝まで熟睡したのだった。

翌朝真理子が目を覚ましたとき、摩利夫は朝風呂を楽しむために温泉に出かけていて、布団はもぬけの殻だった。真理子の酔いはすっかり醒めていて、頭はすっきりしていたが、

「摩利夫さんとはニアミスだったわ」

という囁きが自分の内から聞こえてくるようだった。

真理子は学生時代から山川摩利夫に対して特別な感情を懐いたことは一度もなかった。ただマリコとマリオという同音を持つ共通点に親近感を感じていたのは確かだった。だが、こうして何事もなかったとはいえ、摩利夫と二人だけで同じ部屋に一夜寝泊まってみると、酔っ払った上のこととはいえ、少しやり過ぎだったかという気になるのである。

真理子はもう一度

「摩利夫さんとはニアミスだったわ」

と小声に出して呟くのだった。

墓参と記念誌の出版という理由があったために二年続きで同期会を開いてみると、皆の気持ちは、次の年は休むという方向には行かなくなり、次の年もどこかで会を持とうということで皆が一致した。旅行の幹事

は真理子が手馴れているということで、コースの設定を彼女が受け持つことになり、どの方面に行くかというところだけ、皆の意向を出し合うことにした。

皆の意向が「比較的近間・源泉掛け流しの秘湯」で一致したために、翌年は福島県高湯温泉で同期会を持った。千葉の野原弘子を除く五人にメンバーが固定した感があるが、誘いだけは野原をはずすことはできない、連絡を続けていればいつか野原弘子が参加するのではないかと皆思っている。

真理子は山川に会うと

「あのとき、摩利夫さんとはニアミスだったわ」

という囁きがまた内から聞こえてきたのだが、

「あの時何もなかったお蔭で今年も同期会を持つことができるのだわ」

としみじみ思うのだった。

県立湘南高校創立八〇周年記念の同期会が横浜の崎陽軒で開かれたのはいつのことだったろう。真理子の学年は一年おきに同期会を開いて、まだ存命の恩師を一人ずつ呼んで講演を聴き、その後に恩師を囲んで宴会を持つというしきたりができているのだが、母校の創立八〇周年を記念してということだったからその会は特に盛会だった。参加者も優に一〇〇人は超えていた。一〇人掛けの丸テーブルが一二、三は出ていたようだった。

真理子は隔年の高校同期会にも、出られる限り出ることにしていたから、この会にも参加した。宴ははじめのうちは同じテーブルの中のやり取りに終始していたが、やがてテーブルを越えて人の往来が盛んになっていった。そうした頃合いの中で、真理子はウェイターが自分に近づいてくるのを認めた。

「この名刺の方がお話したいと仰っておりますが」

と言いながら名刺を差し示す。視線を当てると「島津製作所 社長 島津万里生」の文字が躍っている。あ、キニの万里生さんだわ、真理子は急に懐かしさがこみ上げてきた。早速行かなければと思う間もなく、気づいたときには万里生が近づいてきていた。

「あら、今お伺いしようと思っておりましたのに」

「参加者名簿と山本さんの姿を見て、待ちきれずに飛んできてしまいました」

「卒業以来のことですから、何年ぶりでしょうか。キニさんは健康そうで、軽やかで、あの頃とほとんど変わっておりませんのね。髪が白くなったぐらいでしょうか、変わったのは。いただいた名刺を拝見して察す

ると、万里生さんはお父様の会社をお継ぎになったのですね」
「ええ、父が早くに亡くなりましたので、それなりに苦労しました」
「それではずっと藤沢においでだったんですか」
「いえ、父が亡くなったのを汐に元の大阪へ戻ったんです。五年ほど前にまた藤沢にやって来まして、今は藤沢です。真理子さんはずっとお変わりありませんでしたか」
「大学を出てすぐ県立高校の教員になって定年まで勤めましたが、私は私なりに波乱万丈の人生でしたわ。今から思うと、あの頃私は万里生さんが好きでしたわ。はじめは万里生という名前の人がいるということに戸惑いがあったんです。でも、それがとても近しいことに思えるようになって、次第に好きに変わっていったんです」
「そうでしたか。少しも知りませんでした。万里生というのは男の子の名前としては珍しいですからね。あのとき好きだと、そう言ってくれれば、わたしの人生もずっと変わったものになっていたことでしょうに。そうか、すると、あのとき王手をかけてみるんだったかな」
知らなくて損をした、王手をかけてみるんだった、と繰り返しながら、島津はまた自分の席のほうに戻っていくのだった。
母校八〇周年記念の同期会から帰ると、真理子はその時もらった名刺を取り出して、島津万里生の住所と電話番号を確認し、万里生宛の長い手紙を書いた。いまさら何が変わるというものでないことは百も承知のことであったが、自分が七〇歳の古希になるのを前にして、二人のマリオと邂逅したことが自分の人生にどのような意味を持つものであったのか、整理しながら、考えをまとめる必要を感じたからであった。
「二人のマリオ」という言葉が不意に真理子の心に浮かんで、消えた。彼女は改めて声に出して呟いた。二人のマリオ、そうだ、二人のマリオだ。
真理子はもう何年も前から、横浜市民ホールの小ホールで二ヶ月ごとに年六回行われている柳家小満(こまん)りの独演会にほとんど毎回出かけていって本物の真打の落語をずっと聞いてきたことを突如思い出した。一一月の独演会の際には翌年の年間会員券を売り出している。今年の一一月が来たらその年間券を自分の分の他二枚購入して、島津万里生と山川摩利夫にも寄贈することを思いついた。自分が間に入って、二人のマリオを会

わせてみよう。それで何が始まるというものでないことは確かなのだが、これはなかなかの思いつきではないかと真理子は手を打った。「マリ」にまつわる三人が並んで小満り師匠の落語を聞いて笑う図は想像するだけでも楽しいことに思えた。

それから、真理子はかすかに胸のときめくのを感じながら、一一月の小満り独演会が来るのを今か今かと待ち望むのだった。

二人のマリオとつかず離れずの関係で過ごしてきた五〇年を振り返ると、真理子は男名としてのマリオを少しも違和感のない名として受け止めることができるようになっていることにちょっと不思議な感じを持つのだった。

了

横浜市民ホール

崎陽軒本店入り口

［付］折り句余滴

◆みなせ　皆仲間　仲良く競う　背比べ

◆杖　田　自由自在に　世の中描き　嬉しがらせる　大丈夫

◆橋　本　拍手喝采　しとどに受けて　もっと書きます　友と恋

◆藤　塚　不撓不屈で自由を求め　務め励むは　神のため

◆岡　森　おっとり構えて　辛口批評　元はブン屋の　理想像

◆成　平　何はなくとも　隣人来れば　人肌酒に　ラッパ菜

◆篠　崎　白や黄色の　野の花詠んで　座興取り持つ　器量人

◆亀　井　蛙でも　名人上手　井戸の外

◆下　田　忍ぶとも　元はみんなの　ダイヤかな

◆若　葉　若くとも　買える才能　バラの花

◆有　本　ありそうもない　理想を追って　元に戻るか　共白髪

◆柳　川　山から川を　流れ下る　我慢根性　我行かん

◆大　山　大きな仏　大きな説話　やがて陽を見る　守り神